

かやぶき屋根の荻ノ島集落、労働組合と協定 耕作放棄地を解消

かやぶき屋根の家屋が環状に並んだ集落として知られる柏崎市の荻ノ島集落が、流通や繊維業界の労働組合でつくるUAゼンセン新潟県支部との間で耕作放棄地の解消などのための協定を結んだ。家屋の再生で専門学校とも協定を締結済み。高齢化と人口減に見舞われている中山間地の集落が存続のため、交流人口の増加を目指す。

集落でつくる荻ノ島地域協議会は、UAゼンセン新潟県支部と「荻ノ島里づくり活動連携協力協定」を結んだ。農地と集落の維持・保全で連携するのが目的で、まず農地については耕作放棄地の解消に取り組む。集落についてはこれから協議するが、道普請などの共同作業が対象になる見通しだ。

25日の締結と同時に、過去2年ほど稲作が行われていなかった集落の水田で組合員とその家族らが参加した田植え作業が行われた。県内各地から参加した組合員など約50人が、6アールの水田にコシヒカリを植えた。

協定を結んだのは「単発ではなく長く取り組むため」(UAゼンセン新潟県支部の中村弘一氏)。同支部が地域おこしで協定を結んだのはこれが初めて。特に集落内に企業や組合があるわけではないが、同支部は社会貢献との位置づけで今後10～20年かけてボランティアとして協力する考え。

「将来的には酒米を栽培して日本酒を造り、それを販売して収益を荻ノ島に還元したい」(中村氏)という。

荻ノ島はまた建築デザイン科などを持つ新潟工科専門学校(新潟市)とも「家屋再生活動連携協定」を締結。集落内に8軒あるかやぶき家屋のうち、空き家となっている2軒の活用について協力する。

既に新しい定住希望者1人の住居として1軒について改装を実施。実費はいずれも集落側が負担、学校は実習としてこれを引き受けた。

残る1軒については芸術家を招き制作環境を提供する施設としての活用を検討している。

荻ノ島はこれまでかやぶき家屋を生かした活性化に取り組んできたが、最近では集落の人口が66人まで減少し、高齢化も進展。65歳以上の高齢者が約半数を占めるという。かつて20軒以上あったかやぶき家屋も現在は8軒まで減っている。

荻ノ島地域協議会の春日俊雄会長は「集落存続のためにもより深く関与する外部の人を増やし、交流人口の質を上げる必要がある」と話している。

NIKKEI Copyright © 2014 Nikkei Inc. All rights reserved.

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。